

現代インドネシアの宗教間関係に関する人類学的考察 ～ジャワ・フローレスの地域間比較とカトリック巡礼地～

上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科

地域研究専攻博士後期課程 1 年

織田悠雅

1. 研究の背景

宗教的に多様なインドネシアでは、イスラームが人口の約 9 割を占めるが、約 1 割のキリスト教を含む 6 つの公認宗教があり、宗教間の平等が保障されている。しかし、2000 年代後半以降、少数派の教会への攻撃や教会建設反対運動などの宗教的不寛容の高まりが社会問題となっている。

これまで報告者は、インドネシアにおける宗教的不寛容の高まりに関心を持ち、研究を進めてきた。その一つの成果である修士論文では、理念上宗教間の平等がうたわれるインドネシアにおいて、宗教的自由が歴史的過程の中で制限されてきたこと、そのことが後の時代における宗教的少数派への排他的運動を下支えしてきたことを明らかにした。合わせて、現代インドネシアにおける不寛容の高まりの中で、ジャワのカトリック信徒が少数派としての生きづらさを抱えていることも明らかにした。しかし、報告者のこれまでの現地調査では、ミクロなレベルにおける宗教間の調和的な関係も観察し、調和と対立が複雑に入り乱れる現実が広がっていることを確認した。そこで、修士論文で主に扱ったマクロに展開する宗教間関係が人々の生活のレベルでどのような影響をもたらしているのか、また宗教間の対立だけではなく協力関係にはどのようなものがあるのかについてさらなる調査が必要であると考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、次の二点について明らかにすることを目的とした。一点目は、現代インドネシアの地域社会における宗教間関係の実態である。本研究では、修士論文で考察したインドネシアの宗教間関係を規定しているマクロな要因が、社会における宗教間関係にどのような影響を与えているのかについて考察することを試みた。二点目は、ジャワ地域におけるカトリック巡礼地をめぐる宗教間の対立と協力についてである。ジャワ地域では近年カトリック巡礼地が増加しており、巡礼地建設においては多数派のイスラーム教徒が協力する場合もあれば、大規模な反対運動を組織することもある。本研究は、カトリック巡礼地をめぐる協力と対立に関する長期調査の一環として、予備調査を実施した。

3. 調査概要

本研究では、調査方法として聞き取り調査と参与観察を実施し、あわせて文献資料収集を行った。調査は以下の日程で実施した。

8/28-8/30：羽田空港⇒シンガポール・バリ・エンデ経由⇒マウメレ

8/31-9/5：東ヌサトゥンガラ州シッカ県マウメレ滞在

9/5-9/6：マウメレ⇒エンデ・バリ経由⇒ジョグジャカルタ国際空港

9/6-9/11：中ジャワ州マゲラン県S町滞在

9/11-9/18：ジョグジャカルタ特別州スレマン県滞在

9/18-9/19：ジョグジャカルタ国際空港⇒シンガポール経由⇒羽田空港

4. 調査で得られた知見（明らかにしたこと）

① 現代インドネシアの地域社会における宗教間関係：カトリック教会の視点から

今回の調査目的の一つである、地域社会における宗教間関係について、フローレスでは様々なコミュニティでの参与観察を、ジャワでは異宗教間での結婚をした家族への聞き取りを行った。

フローレス島への訪問は今回が初めてであり、ネットワーク構築から始めた。また、カトリック信徒が多数派を占めるフローレスにおいて、当初予定していたムスリムの方々への聞き取り調査の機会をいただくことが想定以上に困難であったため、調査計画の修正が必要であった。しかし、カトリック教会や美術実践を行うコミュニティ、カトリック系の学校、神学校、大学などを訪れる中で、継続的な調査を行ってきたジャワ地域とは宗教間関係について異なる点が多々あり、現代インドネシアにおける宗教間関係を考えるうえで重要な気付きのある実り多い調査であった。ジャワ地域との違いとして一番目についたのが街の景観であり、いたるところにカトリック系の学校や神学校、修道院が立地し、街の中心には教会があるといったように、カトリック教会関係の建物が目立っていた。一方で、街中にあるイスラーム関係の建築物は、最近建てられたという大きなモスクが一つあるといった程度で、町中のいたるところにモスクのあるジャワとの違いを感じた。また、カトリック教会の教会建築についても、ジャワでみられるようなジャワの建築様式を取り入れたようなものではなく、西洋式の教会建築を模したものが多く、教会建築における現地文化の表象という点には違いがみられた。

一方で、滞在中に一度行われた、街の大通りを通行止めにして開催されるナイトマーケットのようなカーフリーナイトでは、道の両脇に並ぶ露店の店員のほとんどがヒジャブを付けた女性のムスリムであった。日中の街中では、ヒジャブを着用した人を見る機会はそれほど多くないことを加味すると、宗教間である程度の職業的な分業があることが考えられる。現地で行動を共にし

ていたフローレス出身の方によると、フローレス島にいるムスリムの多くはスラウェシ島など他島からの移民であるとのことであり、インドネシア国内の移住民の存在が宗教的多様性をもたらしている様子を観察することができた。

他方で、すでに複数回訪問したことのあるジャワ地域では、地域社会における宗教間関係として、宗教間関係が前面に表れることの多い異宗教間の結婚について聞き取りを行った。報告者の友人の友人（女性）Aさんの家族を訪問した。Aさんの家族は、父母と1人の姉、Aさんと姉の夫が1人ずつ、子どもが合わせて2人の8人家族であり、父母、娘2人は全員が異なる宗教の相手と結婚している。宗教構成としては、父がプロテスタント、母がイスラーム、Aさんはカトリックだったがイスラームに改宗、Aさんの姉はカトリック、2人の娘の夫は2人ともイスラームとなっている。父母、娘2人の3つの結婚事例は、すべてが異なる手続きを経ている。インドネシアでは1974年の婚姻法改正以降、民事婚は認められず、各宗教の手続きを経たうえでの宗教婚のみが認められることになった。このような背景から、異宗教間の結婚に際しては、どちらか一方の宗教に合わせて結婚することになっているが、実際には異宗教間での結婚が認められることもままある。今回お話を伺った家族の場合には、結婚に際して一時的に改宗したケース、相手の宗教に合わせたケース、異なる宗教のまま結婚したケースが混在していた。また、異宗教間の結婚の場合だと、それぞれが宗教的に熱心でないということを想像しがちであるが、Aさんの家族の場合にはそれぞれがそれぞれの信仰を大事にし、それでも家族間の関係はとても近いということも大変興味深い点だった。

② 新設されたカトリック巡礼地をめぐる宗教間関係の実例：紛争回避のための実践

今回の調査では、昨年建設された新しいカトリック巡礼地（ジョグジャカルタ特別州バントゥル県）を訪問し、管理人の信徒の方から話を伺うことで、建設の経緯や、建設過程の中におけるカトリック信徒たちの宗教間関係への対応や工夫について聞き取ることができた。

まず、巡礼地を含む一帯の土地は、森を切り開いた段々状の地形になっており、一番上段で通りから見える場所が駐車場、2段目3段目がカトリック信徒たちの墓地、4段目に火葬後の灰を保管し祈りをささげるための聖堂が、通りからは全く見えない最下段の5段目に巡礼地であるマリア像を安置する寺院が位置していた。

巡礼地としての寺院が建設されたのは昨年（2023年）のことであるが、巡礼地を含む一帯の土地をカトリック信徒たちが購入し活用するようになったのは、20数年ほど前のカトリック信徒向けの墓地建設がきっかけであった。当時、近隣住民の一部に不寛容な人がおり、カトリック信徒たちは地域にある公共のお墓に受け入れてもらえなかった。そこで、近隣住民から許可を取り、

ムスリム住民から森であった現在の土地を購入して、墓地を作ることになった。年数が経つにつれて墓地が手狭となったため、埋葬から 8 年後に掘り起こして綺麗に整えてから火葬を行い、その灰を保存する方式にすることで、新たなお墓を作るスペースを確保するようになった。その際発生した灰を保存しておくための聖堂が 2 年前に建設された。

そして昨年、この土地に巡礼地建設が行われた。寺院は最下段に建設されたが、その理由として管理人の方が語ったのが、通りから見えにくいところに作ることで宗教間の紛争を回避するということだった。当初の予定では、聖堂の一段上にあたる上から 3 段目のスペースに建設することになっていた。しかし、3 段目では通りから見えてしまうということで、最下段へ建設場所を変更したという。確かに調査者の訪問時も、通りから見てどこに寺院があるのかが全く分からず、4 段目から寺院に至る階段を降りることで初めて寺院の姿を見ることができた。

建設に当たっては、近隣住民に連絡し、寺院のモデルとなったガンジュラン寺院へ連れていき、こういうものを作るのだということを説明するなどの努力を重ね、行政からの建設許可に必要な近隣住民の署名を集めたというエピソードを聞くことができた。また、実際の建設時には、カトリック信徒だけではなく、ムスリムの近隣住民も建設に協力した。建設後に催された司教による祝福ミサの際には、聖堂で司教が MARIA 像を祝福したのち、ムスリムの住民と一緒に下まで像を担いで寺院に安置したということであった。

今回の例からは次の 3 点、①お墓探しという宗教的少数派が抱える課題から土地の歴史が始まっている点、②巡礼地の建設予定地等において宗教間関係を刺激しないような工夫がなされている点、③実際の建設過程や創設後の式典などには近隣住民の協力がみられる点、をうかがい知ることができた。一方で、今回の聞き取り調査では、そのように宗教間の紛争回避のための工夫が必要な地域であるにもかかわらず、なぜ巡礼地を新設することになったのかの経緯や理由について理解することができなかった。この点については今後の調査課題としたい。

③ インドネシア・カトリック教会の全体像をとらえる視点：カトリック系出版文化の広がり

今回の調査では、計画段階では想定していなかったインドネシアにおけるカトリック系出版文化の広がりについても調査することができた。今回訪問した東ヌサトゥンガラ州シッカ県は、カトリックが多数派を占めるフローレス全島のカトリック司祭養成拠点として、フローレス島におけるカトリック教会の中心的な地域であり、カトリック系出版社も存在する。本稿で取り上げるカトリック系出版社とは、神学生が哲学や神学を学ぶレダレロ大学の出版部門、レダレロ出版 (Penerbit Ledalero) である。

今回はこのレダレロ出版の倉庫を訪問し、書籍の閲覧や購入を行った。その際ジャワ島では流

通しておらず認知されていない本が多くあることを発見した。特筆すべきは、インドネシア・カトリック教会史の大書である、オランダ人神学者のステーンブリック (Steenbrink) によるインドネシア・カトリック教会史三部作が翻訳され、出版・販売されていたことである。このステーンブリックによる三部作は英語で出版されたものであり、ジャワ島においては主に英語で読書ができる層の人たちのみが存在を把握しているものである。後日ジョグジャカルタにあるカトリック系図書館でも所蔵状況の確認を行ったが、英語版があるのみでインドネシア語版は所蔵されていなかった。この他にもフローレス島の調査をもとに描かれた民族誌のインドネシア語訳や、フローレス島での宣教活動をおこなった宣教師たちの伝記、中にはインドネシア・ナショナリズムとカトリック教会の関係に関する思想的な学術書なども取り扱われており、インドネシア語で展開する独自のカトリック系出版文化の存在を認識した。

調査者はこれまで主にジャワ島で調査を実施してきたため、インドネシア語で展開するカトリック系出版について、ジャカルタを拠点とするオボール社 (Obor)、ジョグジャカルタのカニシウス社 (Penerbit Kanisius) を中心にとらえてきた。しかし、今回フローレス島を訪問しそこで広がる独自の出版文化や思想的潮流を見ることができたことで、ジャワ島内の出版物だけではなくフローレスも含めたインドネシア全体で展開するカトリック系出版物に目を向けていく必要性を実感した。

5. 研究成果の社会化について

本研究で得られた成果の社会化の一環として、2024年11月23日(土)に報告者企画の研究ワークショップ「マレー世界におけるカトリック教会とエスニシティ：ジャワ・華人移民・マレー語」にて研究発表を行った。報告者の発表テーマは、ジャワにおけるカトリック巡礼地成立史であり、カトリック巡礼地形成におけるジャワ文化との関係の在り方や、外国人の存在などについて整理した。発表では、先行研究を土台にしながら、今回の調査で得られた知見を盛り込んだ。特に、ジョグジャカルタで訪問した巡礼地の事例は、巡礼地の様式が一度定められると、アレンジを加えながら再生産されていくという主張を強化するデータとして取り上げ、今後の展望につながる重要な位置を占めた。